

## 1 「生徒による授業評価」について

### (1) 実施の目的

生徒の確かな学力を育成するため「生徒による授業評価」を行うことにより、各学校における教員の指導力の向上や授業の改善を図るとともに、生徒自らが学習への取組を見つめ直す機会とする。

### (2) 「生徒による授業評価」を踏まえた授業改善

授業評価の集計・分析結果を踏まえ、学校全体及び各教科・科目等の課題を把握し、その解決に向けて、研究授業や校内研修を実施し、授業改善に取り組む。

### (3) 結果の公表

授業評価の集計・分析結果及び、その課題を踏まえた授業改善の取組等の実施結果について、生徒・保護者・学校評議員等に公表する。

## 2 実施対象及び回答総数

### (1) 実施対象

全県立高等学校及び県立中等教育学校における各教科・科目の授業

○ 課程数

	全日制	定時制	通信制
実施課程数	141	21	2

○ 在籍者数（千人）

	全日制	定時制	通信制
在籍者数	118.1	5.6	4.0

(平成27年12月時点の調査結果による)

### (2) 回答総数（平成27年12月時点の調査結果による）

○ 普通教科回答総数（千人）

国語	地歴	公民	数学	理科	保体	芸術	外国語	家庭	情報
150.0	100.7	49.8	129.8	130.3	179.3	59.4	165.1	51.9	34.2

○ 専門教科回答総数（人）

農業	工業	商業	水産	家庭	看護	情報	福祉	理数	体育	音楽	美術	英語
7,244	30,537	8,896	1,172	2,208	686	746	2,890	1,241	3,003	843	1,238	4,322

## 3 「生徒による授業評価」の実施時期と方法、分析等

### (1) 実施時期

原則として年2回以上アンケート方式で実施する。1回目は夏季休業前に実施し、当該授業の課題等の状況を把握した。2回目は冬季休業前に実施し、課題の改善状況について把握した。

### (2) 調査内容

各学校共通の内容として、3つの大項目、8つの中項目ごとに共通小項目を設け、「4 かなり当てはまる」、「3 ほぼ当てはまる」、「2 あまり当てはまらない」、「1 ほとんど当てはまらない」の4段階の評価を行った。

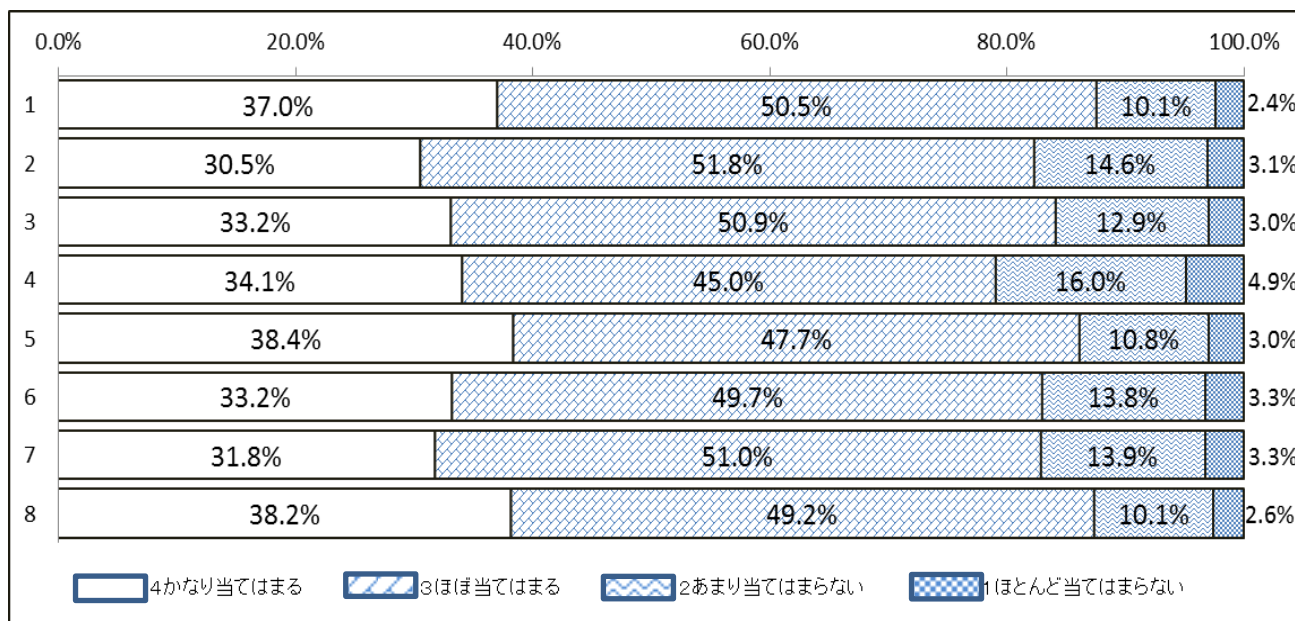
### (3) 分析の方法

平成27年度の4段階評価「4 かなり当てはまる」、「3 ほぼ当てはまる」、「2 あまり当てはまらない」、「1 ほとんど当てはまらない」のうち、調査結果の傾向を顕著に示す「4 かなり当てはまる」に焦点を当てて分析を行った。

#### 4 調査の結果

##### (1) 普通教科について

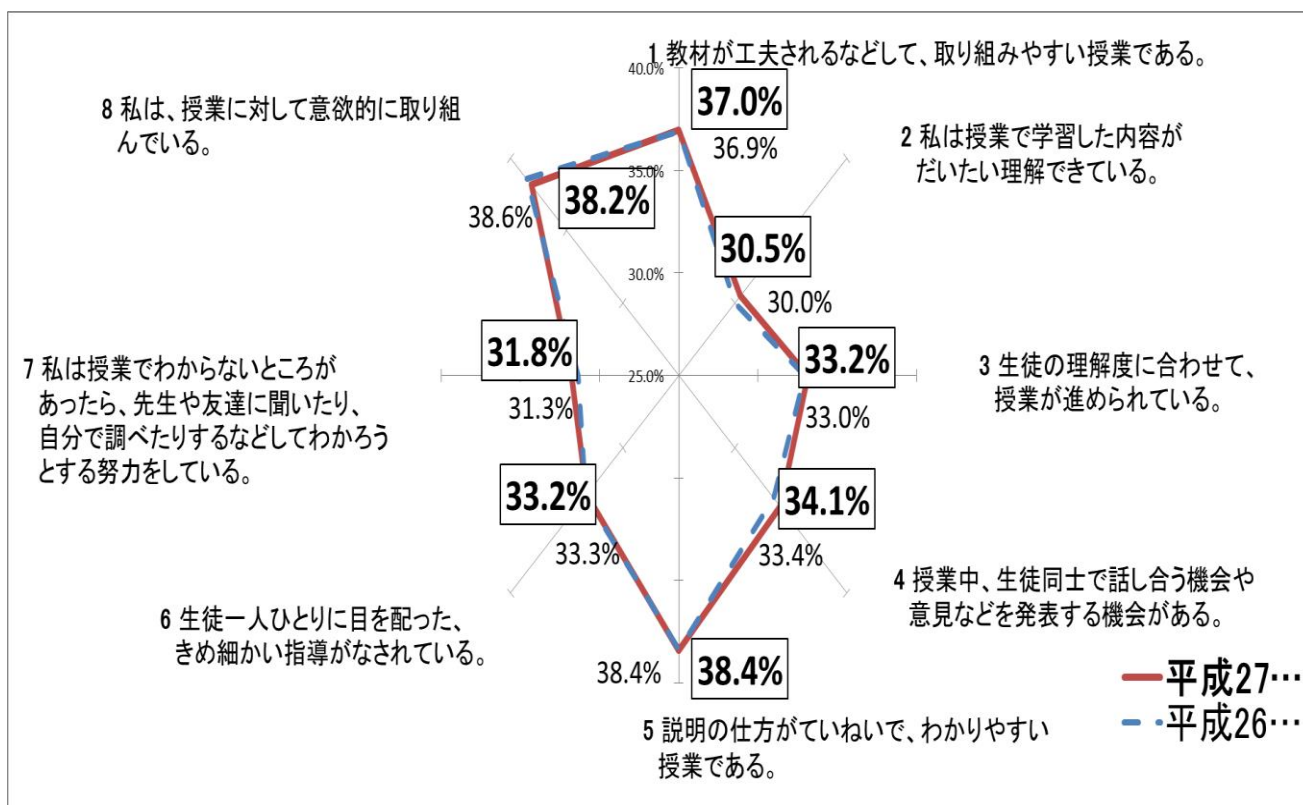
○ 普通教科の共通小項目に対する4段階の評価の割合は、次のとおりである。縦軸の数字1～8は共通小項目の数字。項目内容は第2図を参照



第1図 普通教科の共通小項目集計

※%は小数第2位を四捨五入

○ 全教科の共通小項目の評価の結果のうち、「4 かなり当てはまる」とした回答の割合をレーダーチャート(青の実線)で表した。また26年度の評価(赤の点線)と比較できるようにした。



第2図 普通教科の共通小項目ごとの評価結果「4 かなり当てはまる」の割合

○ 各教科の共通小項目の評価「4 かなり当てはまる」を表にし、全教科で比較した。

第1表 普通教科ごとの共通小項目の評価「4 かなり当てはまる」の集計

共通小項目	国語	地歴	公民	数学	理科	保体	芸術	外国語	家庭	情報	平均
1	36.4%	39.1%	37.9%	32.7%	33.3%	39.9%	43.0%	37.4%	36.5%	35.4%	37.0%
2	29.6%	30.5%	30.7%	25.6%	24.1%	39.1%	40.4%	28.1%	30.6%	27.7%	30.5%
3	33.6%	32.2%	33.0%	29.4%	28.0%	39.3%	40.2%	32.4%	31.7%	29.7%	33.2%
4	35.4%	29.5%	33.4%	27.2%	27.0%	39.6%	41.1%	39.3%	34.0%	29.1%	34.1%
5	39.5%	40.8%	40.1%	35.9%	33.8%	41.9%	42.9%	37.4%	36.3%	32.9%	38.4%
6	32.7%	30.3%	30.8%	31.3%	27.9%	38.5%	43.7%	33.2%	31.6%	32.6%	33.2%
7	29.4%	30.4%	29.3%	32.4%	28.6%	35.6%	38.8%	31.5%	29.3%	32.8%	31.8%
8	35.7%	37.2%	36.4%	35.0%	33.4%	46.2%	48.2%	35.8%	37.1%	38.3%	38.2%

※塗りつぶしは教科内で割合の最も高いもの（赤で太枠）と割合の最も低いもの（青）を示す

4段階評価のうち、「4 かなり当てはまる」と「3 ほぼ当てはまる」の評価を合わせると、ほとんどの共通項目で80%を超えた。

教員の授業内容や指導方法などに関する共通項目である1～6では「1 教材が工夫されるなどして、取り組みやすい授業である。」(37.0%)、「5 説明の仕方がいいのでわかりやすい授業である。」(38.4%)の割合が高くなっている。一方、「2 私は授業で学習した内容がだいたい理解できている。」(30.5%)の割合が低くなっている。また、昨年度に比べ、「4 授業中、生徒同士で話し合う機会や意見などを発表する機会がある。」の割合は0.7ポイント上昇しており、近年本県で力を入れているアクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業が浸透してきているとともに、教員が教材づくりに工夫を凝らし、分かりやすい授業を日常心掛けていることが分かる。(第1図)

課題としては、「2 私は授業で学習した内容がだいたい理解できている。」(30.5%)の割合が昨年度に比べ0.5ポイント上昇しているが、まだ低いことが挙げられる。

生徒自身の取組状況に関する項目である7～8に注目してみると、昨年度に比べ、「7 私は授業でわからないところがあったら、先生や友達に聞いたり、自分で調べたりするなどしてわかろうとする努力をしている。」(31.8%)の割合が0.5ポイント上がっている反面、「8 私は授業に対して意欲的に取り組んでいる。」(38.2%)の割合が0.4ポイント下がっている。授業に対する意欲的な取組と、授業での疑問点に対して自ら進んで解決しようとする姿勢が、傾向として一致していない部分がある。(第2図)。

教科ごとに見てみると、多くの教科が全体的に同様の傾向を示しているが、外国語においては、生徒の言語活動に関する項目である「4 授業中、生徒同士で話し合う機会や意見などを発表する機会がある。」(39.3%)の割合が一番高くなっていることから、生徒主体の授業が進んでいることが推測できる(第1表)。

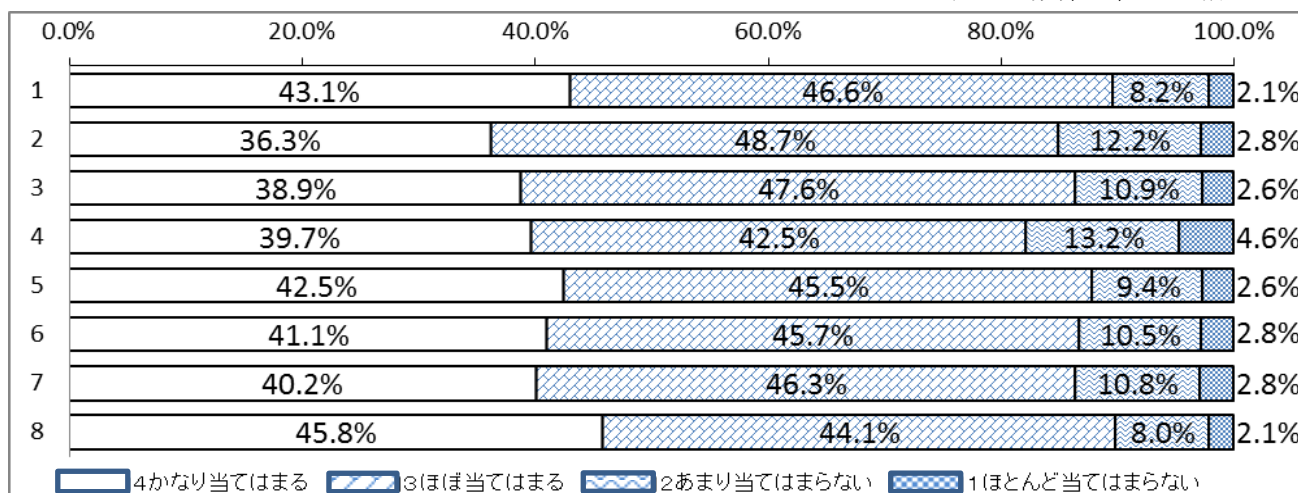
(2) 専門教科について

○ 専門教科の共通小項目に対する4段階の評価は、次のとおりである。

第2表 専門教科の共通小項目集計

共通小項目	かなり当てはまる	ほぼ当てはまる	あまり当てはまらない	ほとんど当てはまらない
1 教材が工夫されるなどして、取り組みやすい授業である。	43.1%	46.6%	8.2%	2.1%
2 私は、授業で学習した内容がだいたい理解できている。	36.3%	48.7%	12.2%	2.8%
3 生徒の理解度に合わせて、授業が進められている。	38.9%	47.6%	10.9%	2.6%
4 授業中、生徒同士で話し合う機会や意見などを発表する機会がある。	39.7%	42.5%	13.2%	4.6%
5 説明の仕方がいいで、分かりやすい授業である。	42.5%	45.5%	9.4%	2.6%
6 生徒一人ひとりに目を配った、きめ細かい指導がなされている。	41.1%	45.7%	10.5%	2.8%
7 私は、授業で分からないところがあったら、先生や友達に聞いたり、自分で調べたりするなどして分かるよう努力をしている。	40.2%	46.3%	10.8%	2.8%
8 私は、授業に対して意欲的に取り組んでいる。	45.8%	44.1%	8.0%	2.1%

※ %は小数第2位を四捨五入



第3図 専門教科の共通小項目集計

○ 各教科の共通小項目の評価「4 かなり当てはまる」を表にし、全教科で比較した。

第3表 専門教科ごとの共通小項目の評価「4 かなり当てはまる」の集計

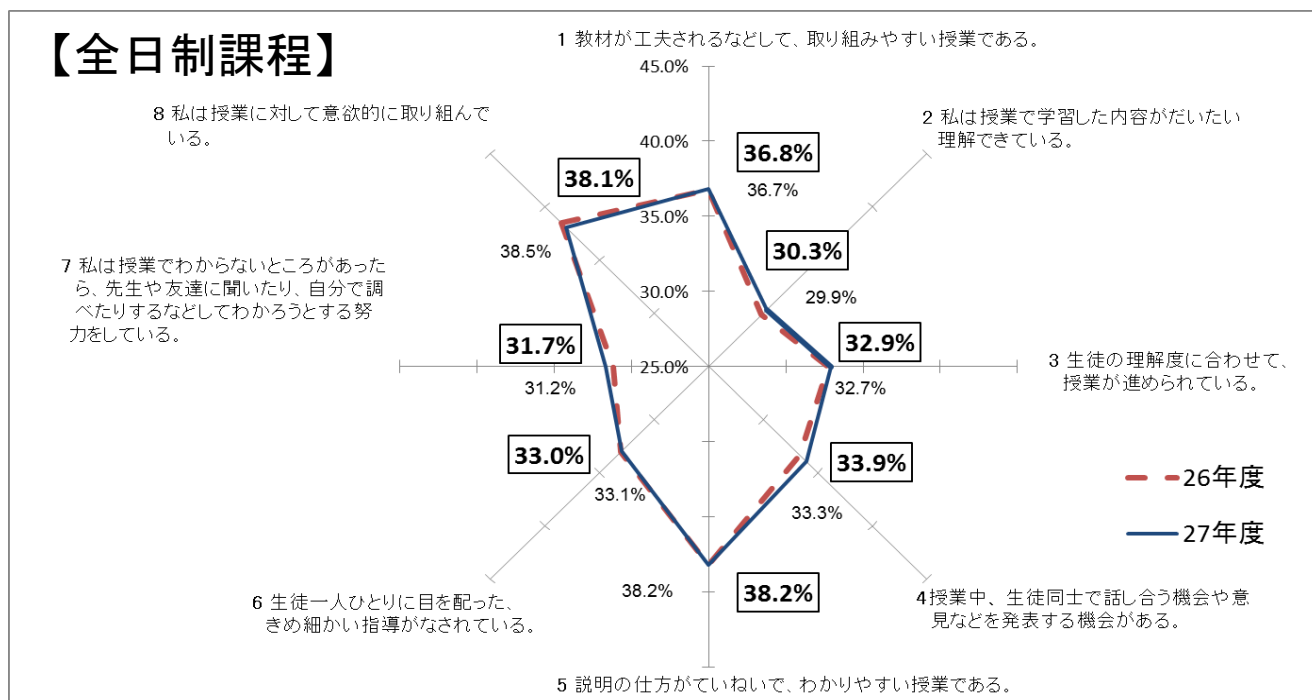
共通小項目	農業	工業	商業	水産	家庭	看護	情報	福祉	理数	体育	音楽	美術	英語	平均
1	44.1%	37.1%	37.7%	43.7%	58.2%	63.0%	40.9%	50.1%	39.6%	67.6%	52.9%	47.3%	61.0%	43.1%
2	33.6%	31.6%	29.7%	30.6%	54.6%	42.9%	25.2%	42.3%	32.5%	70.1%	54.2%	43.8%	49.8%	36.3%
3	36.2%	33.8%	33.6%	37.7%	55.7%	54.4%	28.8%	45.4%	33.4%	68.2%	54.8%	43.7%	54.4%	38.9%
4	37.2%	32.6%	34.2%	35.2%	55.1%	64.6%	41.3%	51.3%	33.8%	68.8%	53.9%	46.4%	64.0%	39.7%
5	43.7%	36.2%	37.9%	45.5%	57.2%	63.1%	35.0%	50.4%	35.9%	67.2%	54.3%	45.7%	60.5%	42.5%
6	38.5%	36.2%	36.2%	41.2%	55.5%	57.1%	32.6%	46.8%	33.3%	68.4%	55.4%	47.0%	56.8%	41.1%
7	39.0%	36.2%	35.7%	35.0%	54.7%	54.4%	35.5%	35.5%	36.1%	67.4%	55.2%	46.4%	52.3%	40.2%
8	47.5%	40.6%	39.9%	43.7%	58.3%	66.9%	40.1%	48.8%	40.4%	74.6%	58.1%	51.1%	59.8%	45.8%

※塗りつぶしは教科内で割合の最も高いもの(赤で太枠)と割合の最も低いもの(青)を示す

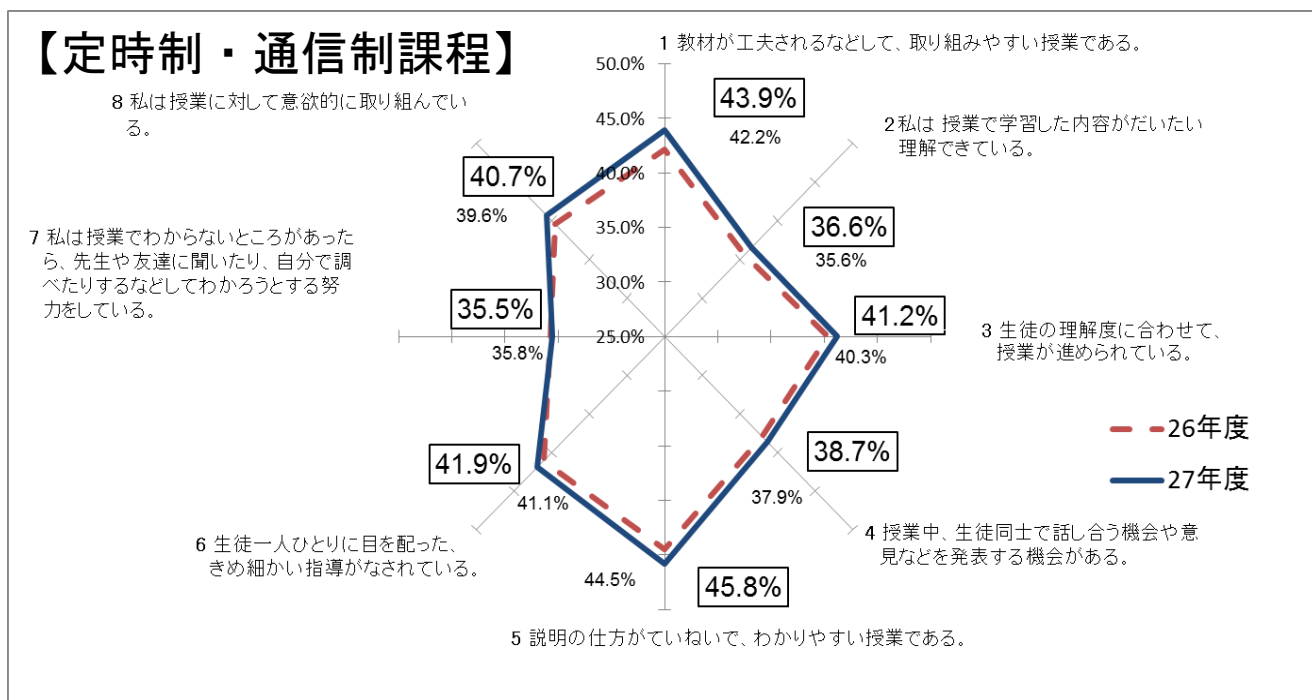
専門教科について「8 私は、授業に意欲的に取り組んでいる」、と回答する割合が高く、「2 私は、授業で学習した内容がだいたい理解できている」、への回答の割合が低い。生徒は意欲的に授業に取り組む姿勢はあるものの、授業内容の十分な理解には至ってない現状が見て取れる(第3表)。

(3) 全日制課程と定時制・通信制課程について

○ 全日制課程と、定時制・通信制課程の普通教科の全教科の平均について、「4 かなり当てはまる」とした回答の割合をレーダーチャートで表した。



第4図 普通教科の共通小項目ごとの評価結果「4 かなり当てはまる」の割合（全日制課程）



第5図 普通教科の共通小項目ごとの評価結果「4 かなり当てはまる」の割合（定時制・通信制課程）

## 5 取組状況等の調査

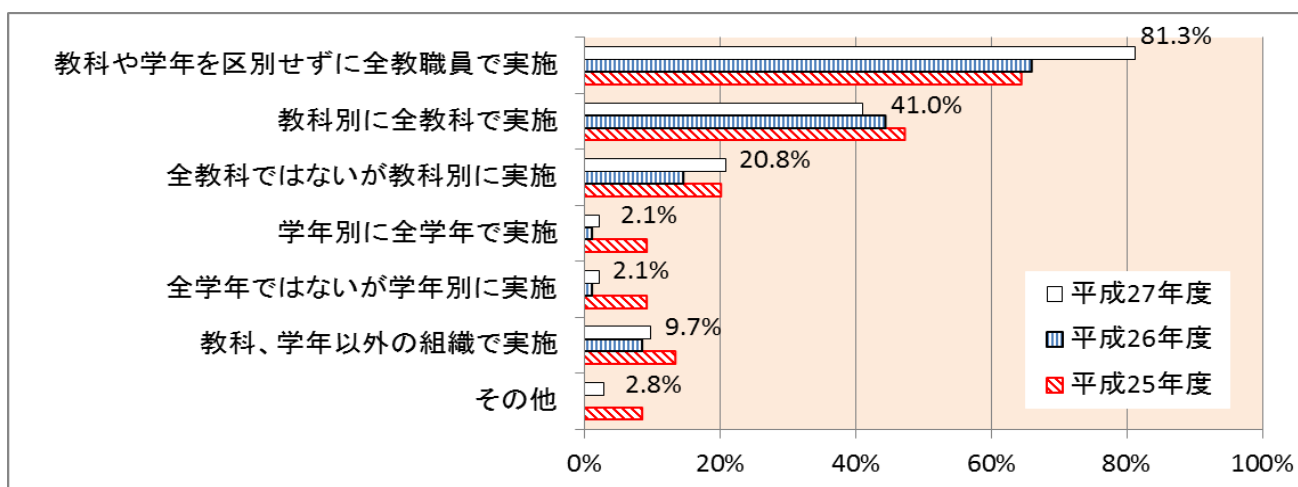
### (1) 研修会について

研修会についての設問に、144校が実施したと回答している(第4表)。その実施形態は、「教科や学年を区別せずに全教職員で実施」(81.3%)が最も多く、次いで「教科別に全教科で実施」(41.0%)、「全教科ではないが教科別に実施」(20.8%)と続く。また教科学年を解体して「教科、学年以外の組織で実施」(9.7%)となっている(第6図)。

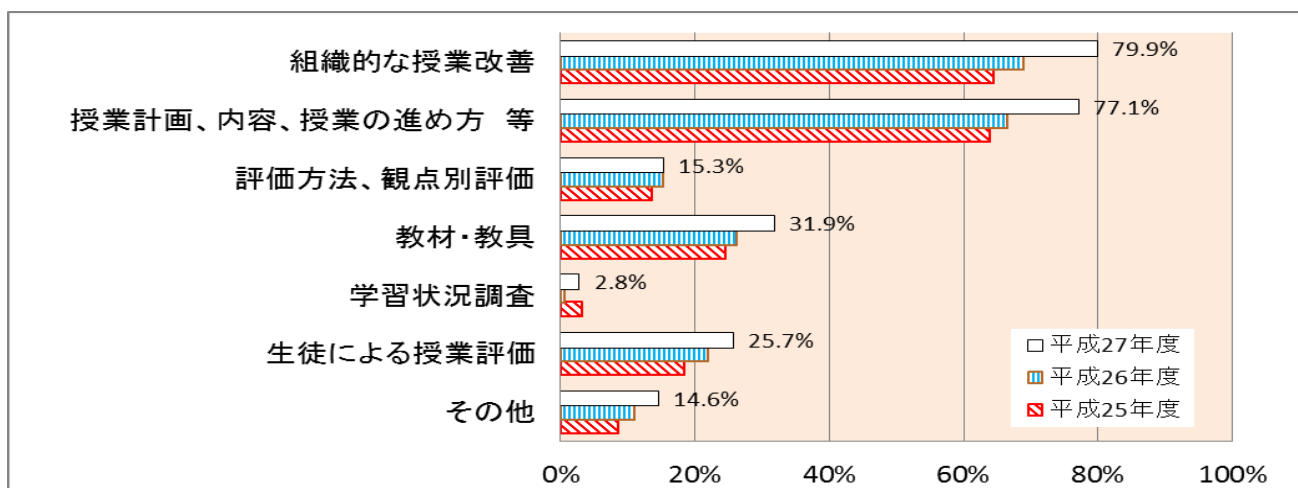
第4表 研修会の実施の有無

実施した(予定を含む)	144
実施していない	20

平成26年度は、「教科や学年を区別せずに全教職員で実施」(65.9%)、「教科別に全教科で実施」(44.5%)であったことから、教科ごとの研修会の割合が次第に減少し、全体での研修会が増加していることが分かる。これは従来からの教科単位ではなく、教科の枠組みを超えた学校組織全体で授業改善を図る意識が高まってきているからと考えられる。



第6図 研修会の実施形態(校数割合)



第7図 研修会のテーマ

研修会のテーマについて、「授業計画、内容、授業の進め方 等」と、「組織的な授業改善」を比較してみると、平成25年度はほぼ同じ割合、平成26年度は、「組織的な授業改善」の方が高くなっている。平成27年度も「組織的な授業改善」の方が高くなっている(第7図)。このことから、個人としての授業の取組から、学校組織として取り組む授業改善に意識が向け始められたと考えられる。

(2) 研究授業について

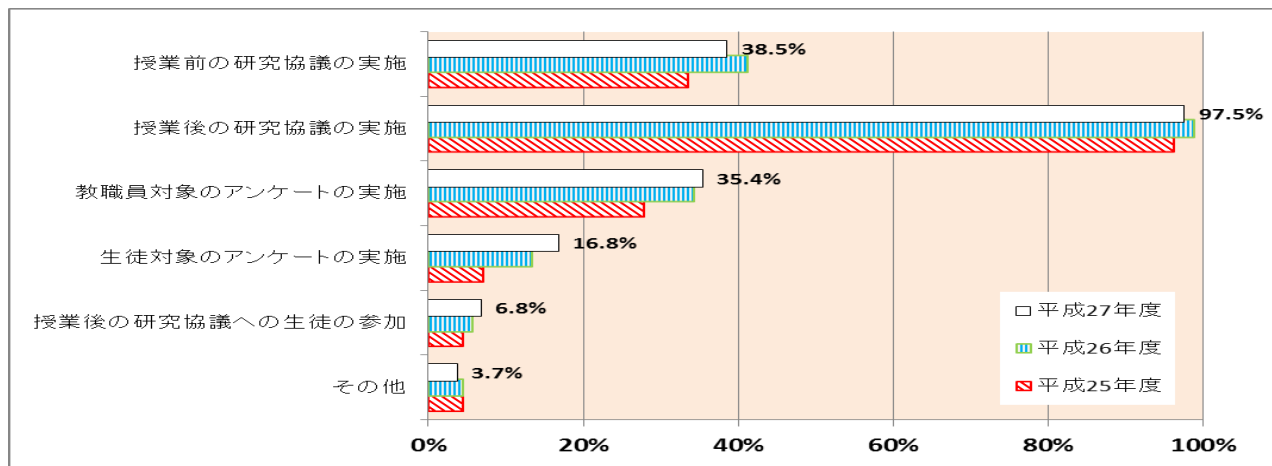
研究授業の実施形態としては、研修会と同様に「教科や学年を区別せずに全教職員で実施」(52.8%)の割合が最も高く、「全教科ではないが教科別に実施」(35.4%)、「教科別に全教科で実施」(23.6%)、がこれに続く(第5表)。

「研究授業を実施した際に行った授業前や授業後の検討会等の内容」の具体的な項目について見ると、研究授業後に研究協議を行っている学校が97.5%を占め、ほとんどの学校で実施していることが分かった(第8図)。

また、教職員対象にアンケートをする学校、実際に授業を受けた生徒にアンケートを実施する学校、研究協議の場に生徒の参加を求めて意見を聞き取るといった検討会を行っている学校も年々増加している。

第5表 研究授業の実施形態

教科や学年を区別せずに全教職員で実施	52.8%
教科別に全教科で実施	23.6%
全教科ではないが教科別に実施	35.4%
学年別に全学年で実施	0.6%
全学年ではないが学年別に実施	4.3%
教科、学年以外の組織で実施	5.6%
その他	3.7%



第8図 研究授業を実施した際に行った授業前や授業後の検討会等の内容

第6表 公開授業の実施形態

(3) 公開授業について

授業前や授業後の検討会等を伴わない公開授業は、146校が実施と回答している。その実施形態は、「教科や学年を区別せずに全教職員で実施」(76.0%)の割合が最も高く、「全教科ではないが教科別に実施」(15.1%)、「教科別に全教科で実施」(9.6%)がこれに続く(第6表)。

「教科や学年を区別せずに全教職員で実施」については、研究授業の実施形態(第5表)と比べて約20ポイント以上高いことから、公開授業においては、教科や学年に関わらず相互に授業を見合うような取組がより広く実施されていると考えられる。

教科や学年を区別せずに全教職員で実施	76.0%
教科別に全教科で実施	9.6%
全教科ではないが教科別に実施	15.1%
学年別に全学年で実施	0.7%
全学年ではないが学年別に実施	3.4%
教科、学年以外の組織で実施	4.8%
その他	4.8%

#### (4) その他の取組について

「『生徒による授業評価』、校内の研修会、研究授業、公開授業以外の授業改善に向けた取組」や、「『生徒による授業評価』以外の授業改善に向けた取組について、平成28年度に新たに取り組む内容、改善点」「『生徒による授業評価』以外の授業改善に向けた取組について、自校の取組で他校の参考になると考えられる内容」、の主な回答は次のとおりである。

- ・公開授業に指導主事や大学教授等を招いたり、近隣中学校など他校種との連携によって、本校授業改善のテーマである「生徒から始める授業改善」の更なる充実を図る。
- ・職員研修会の充実。連携型中高一貫校として、中高6年間を通したリテラシー育成の取組を行っている。
- ・ICT利活用研修を行い、普通教室の授業におけるICT活用を推進する。
- ・校内研修会では、授業改善に積極的な職員や興味深い研修を受けてきた職員を講師に迎え、互いに学び合う、アクティブ・ラーニング型の研修会を手作りで行っていて、職場の良い雰囲気を作ることができている。
- ・授業改善に係る研修会を年2回実施する。事前・事後の研究協議の教科会を年間行事計画に設定し、時間を確保し、充実させる。
- ・校内研修会で、先行事例となる他校の授業のDVDを職員で視聴したり、先行的な取組をしている他校の授業見学をしたり、他校の職員と情報交換をしている。
- ・授業評価の結果を読み取る勉強会、授業改善を行う上での教育心理学など理論的背景を踏まえた勉強会を授業研究に位置付けたい。
- ・教科として、教材の共有・統一化により、内容の均一化と質の向上、定期試験の共通化を図る。
- ・2年間続けてきた研究テーマである「本校生徒の強みと弱み」を把握し、強みを生かした指導を継続的に行うとともに、弱みを克服するための指導についても研究する必要があると考えている。そのためには、従前の講義一辺倒の一方通行的な授業形態から完全に脱却したアクティブ・ラーニングを取り入れた授業展開の工夫が必要であると考えている。
- ・5年間実施した第1学年のモジュール授業の効果を検討した結果、改善して平成28年度も引き続き実施するとともに、指導方法・教材などについて、更なる研究と改善を続ける予定である。
- ・支援教育の視点から、授業でこれからどのような配慮が必要となるかを検討している。
- ・授業をビデオ撮影し、職員全体の研修会で活用している。教科指導実践事例集を各教科で作成し集約している。研究授業後の検討会に生徒を参加させている。
- ・共通指導単元シートを作り、単元を重視した組織的な授業改善に取り組んでいる。

## 6 生徒による授業評価の成果と課題等について

### (1) 成果について

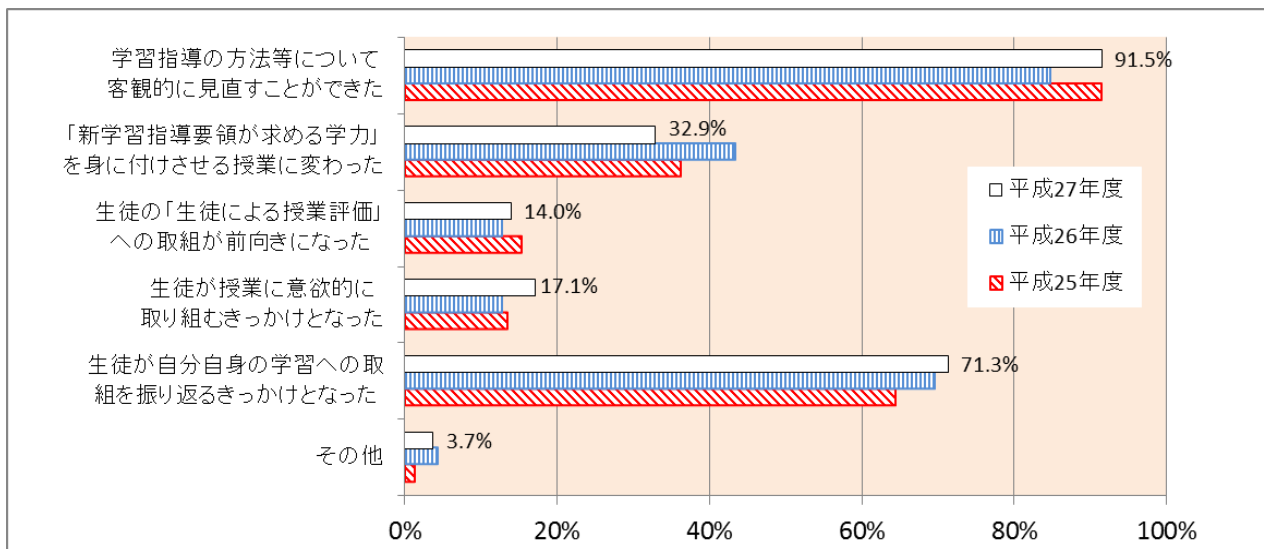
「生徒による授業評価」の結果について授業改善に「十分に反映された」(34.8%)と「少し反映された」(61.6%)とする肯定的な回答は96.4%と高くなっている(第7表)。「生徒による授業評価」の成果の具体的な内容をみると、「学習指導の方法等について客観的に見直すことができた」(91.5%)の割合が最も高く、次いで「生徒が自分自身の

第7表 生徒による授業評価の成果

十分に反映された	34.8%
少し反映された	61.6%
あまり反映されなかった	3.0%
反映されなかった	0.0%
無回答	0.6%



学習への取組を振り返るきっかけとなった」(71.3%)の割合が高かった(第9図)。これらのことは、「生徒による授業評価」が各学校の授業改善の契機となっているとともに、生徒自身の学習への取組の振り返りの契機にもなっていることを示しているといえる。



第9図 生徒による授業評価の成果等

## (2) 課題及び解決策

### ①生徒の回答状況について

授業評価の課題として、「真面目に回答してくれない」、「全てに同じ数字を記入してしまう生徒が増えている」、「教科や担当の好き嫌い、得意・不得意が評価の尺度になってしまっている」など生徒による評価の信頼性に疑問があるとの回答が多く寄せられた。

この調査を形骸化させずに、生徒がしっかりとした授業評価に取り組めるように、評価の必要性や有効性をしっかり説明できるかが課題となっている。例えば、LHR、集会、学年通信などで、この調査がどのように活用され、教員がどのように授業改善に取り組んでいるかについて、生徒にフィードバックする機会を設けるなど、評価の客観性を確保していくことの重要性をアピールするなどの取組も必要と思われる。

### ②準備・集計作業について

準備や集計作業に時間が掛かる、消費される紙が膨大であるという回答も多かった。担当者が異動した後の改良、改変が難しいという声もあがっている。

集計作業の簡素化の工夫として、マークシートを利用している学校の例がある。マークシートの場合は紙の消費量が多くなる問題は残ってしまうが、作業時間は短縮される。

### ③小項目の評価について

項目内容について、共通小項目は教科・科目によって評価しにくい項目が存在するといった回答も例年寄せられている。

8個の共通小項目以外の項目を立てることが可能なので、部分的に教科・科目の特性を踏まえた学校独自の小項目を立てていきたいという学校もあった。学校独自の取組を評価・検証したり、この調査をより有効活用するために、学校独自の小項目を積極的に活用していただきたい。

## 7 生徒による授業評価のよりよい活用のために

生徒の確かな学力を向上させるためには、「組織的な授業改善」を進めることが必要となる。そのための一つの方策として「生徒による授業評価」を積極的に活用していただきたい。

＜教員個人の授業の振り返りとして活用＞

生徒からの評価を通して授業の課題を改善し指導力の向上につなげる。

＜組織による授業改善を目的とした校内授業研究として活用＞

R P D C AサイクルにおけるRとCのデータの根拠とする。詳しくは平成24年3月神奈川県教育委員会発行の冊子「組織的な授業改善に向けて」や、平成26年3月県立総合教育センター発行の研究成果物冊子『組織で取り組む授業研究の工夫に関する研究—教員間の共通理解に基づく「協働する授業づくり」—』、平成27年3月県立総合教育センター発行の『組織で取り組む授業研究の工夫に関する研究—目標の共有化による「協働する授業づくり」—』を参考にいただきたい。

R(調査)：学校の実態と課題の把握

P(計画)：実践・研究の計画 テーマ(研究テーマ)の設定

D(実施)：テーマに即した授業づくりの実践

C(評価)：授業づくりの評価や目標達成状況の評価

A(改善)：更なる改善の実施

＜学校独自の小項目設定による活用＞

「生徒による授業評価」の共通小項目だけでは生徒の実態を把握することが難しいと考えられることがある。この場合は、学校の実情に応じて学校独自で小項目を作成することができる。いくつかの例をあげるので参考にいただきたい。

- 指導の工夫についての評価(例：学習目標が明確である・ICTの利活用を進めている など)
- ガイダンス指導についての評価(例：授業の始めや終わりに学習内容のあらまし〔見通し、目標・意義〕を示したり、学習したことを振り返ったりする指導がなされている など)
- 生徒との関係についての評価(例：学習内容が分かりにくかった場合に質問や補習などでいいに対応してくれる など)
- 授業の説明についての評価(例：教員の指示が分かりやすい・質問が分かりやすい など)
- 教材・教具についての評価(例：板書やプリントが整理されていて見やすく、ノートをとりやすい など)
- 学習効果についての評価(例：学力や技能の伸長を実感できた など)
- 学習内容に対する興味についての評価(例：この授業を受けて、教科・科目に対する興味をより持てるようになった など)
- 生徒自身の自己評価(例：予習・復習を行っている など)